

愛知県立日進西高等学校の取組（国語科）

—「古典B」「古典」における調査研究（1年目）—

1 はじめに

本校は、1983年（昭和58年）に創立された全日制普通科高校である。名古屋市の東部丘陵地帯、日進市にあり、名古屋市天白区と緑区に隣接する。現在は、一学年8クラス（320名）で、生徒の9割以上が大学進学を希望している。進路目標に沿って第2学年より文・理の類型に分かれ、文型選択の生徒はさらに、第3学年で文Ⅰ（私立文系）類型と文Ⅱ（国立文系）類型に分かれる。

素直な気質の生徒が多く、真面目に授業に参加し、与えられた課題をこなすことはできるが、主体的・意欲的に学習に取り組む姿勢はあまり見られない。一方、部活動が盛んであるため、こちらの面ではほとんどの生徒が意欲的な取組を見せている。能力は有るが、学力を伸ばす方向に向かっていないというのが、現在の本校生徒の状況である。

4月、「逆向き設計」「パフォーマンス課題」「ループリック」など、聞き慣れない言葉に戸惑いながら、研究を開始した。今年度は、まず、生徒が「苦手」「嫌い」な科目の筆頭に挙げる古典において、実践を始めることとした。生徒の古典嫌いは、古文単語、古典文法、漢文句法などの知識を習得できないことに因るところが大きい。それらは、古典を読むために必須の事項ではあるが、古典嫌いを生む原因となっていることも事実である。そこで、古典を「好き」にさせ、古典の文章を理解したいという意欲を喚起するように、「古典を脚本化し、実演する」という言語活動を設定した。理解したいという思いが募れば、古典の知識を習得する動機になるはずである。今年度は「古典の実演」を主たる言語活動とし、そこからパフォーマンス課題を考え、ループリックを使って評価する実践をしながら、生徒の意欲を引き出し、日本の伝統的な文化への理解を深める評価手法の研究を行っている。

2 研究の目的

「中央教育審議会初等中等教育分科会高等学校教育部会 審議まとめ」（平成26年6月）は、学力の重要な三要素として「基礎的・基本的な知識・技能」、「基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決する力（思考力・判断力・表現力等）」、「主体的に学習に取り組む意欲・態度」を挙げている。本校の実情に鑑みると、「主体的に学習に取り組む意欲・態度」の向上を図ることができれば、知識・技能や課題解決能力も同時に身に付くのではないかと思われた。そのためには、生徒が、古典を「面白い」と感じ、さらに「分かる」という成功体験を味わえる言語活動が必要である。

研究の構想段階から、古典作品の実演を取り入れた授業は、垂直型（知識注入型）の授業に比して、生徒が楽しむ水平型（双方向型）の学習活動になることが予想できた。脚本化という創作的な活動により、生徒の「読む能力」も伸ばせると考えた。しかし、その「読む能力」や「関心・意欲」の向上について、具体的に測定する方法が分からない。従来のペーパーテストでは測れない「読む能力」「関心・意欲」をどう測るのが課題であった。そこで、今年度は、「読む能力」「関心・意欲」を評価するパフォーマンス課題及びループリックの作成について検討することを目的とし、研究を進めた。

3 研究の方法

第3学年及び第2学年において、実演に適した教材を選定し、パフォーマンス課題とそれを評価するためのループリックを作成し、授業を実施した。授業後、生徒の作品を見ながら振り返りをし、パ

パフォーマンス課題とルーブリックの妥当性を検討し、改訂していった。今年度行った取組の概要を以下に示す。校内委員会は国語科会の中で適宜実施した。

- (1) 研究授業・研究協議①：第3学年古典『枕草子』『古今の草子を』（平成26年6月19日）
- (2) 早稲田大学教育・総合科学学術院 町田守弘教授 訪問（平成26年6月28日，小林）
- (3) 平成26年度県立高等学校教育課程課題研究「国語研究班」における研究

今年度の研究主題を「学習指導要領のねらいを生かすための指導方法及び様々な評価方法に関する研究」とし、県立高校教諭16名と指導主事等が参加し、以下の研究会を実施した。

- 第1回 平成26年7月25日「実践状況の発表と研究の進め方の確認」
- 第2回 平成26年9月26日「実践報告と指導方法及び評価手法についての研究協議(1)」
- 第3回 平成26年10月31日「実践報告と指導方法及び評価手法についての研究協議(2)」
- 第4回 平成26年11月25日「研究のまとめ」

- (4) 言語活動指導者研修（平成26年10月15日～17日，小林）

茨城県つくば市教員研修センターで開催された「言語活動指導者研修」に参加した。

- (5) 研究授業・研究協議②第3学年古典『史記』『荆軻』（平成26年10月27日）
- (6) 研究授業・研究協議③第2学年古典B『源氏物語』『若紫』（平成26年10月27日）
- (7) 研究授業・研究協議④第3学年古典『蜻蛉日記』『うつろひたる菊』（平成26年12月10日）
- (8) 研究授業・研究協議⑤第2学年古典B『大鏡』『道長，伊周の競射』（平成27年1月21日）
- (9) 「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究(国語班)」研究発表会(平成27年1月21日)
日進西高校にて研究授業⑤，研究発表，質疑応答・助言という日程で実施した。参加者74名。

4 研究の実際

研究を始めるに当たり、今年度はまず、垂直型の授業となりがちな「古典」「古典B」の授業改善に取り組むことに決め、生徒の意欲が高まりそうな「実演」を主たる言語活動として選んだ。その時は、実演そのものがパフォーマンス課題になるだろうと考えていた。

ところが、実演を評価しようとするグループとしての評価になり、個人の評価にならない。また実演された作品には生徒のもつさまざまなスキルが発揮されており、それを全て「読む能力」「関心・意欲」の観点で評価するのは妥当性に欠けるという問題が明らかになった。しかし、実演という言語活動への生徒の関心は高く、また汎用性の高い言語活動であるため、当面試行を続けることにした。

- (1) 研究授業・研究協議①：第3学年古典『枕草子』『古今の草子を』（平成26年6月17日）

『枕草子』の「古今の草子を」の段には、中宮定子が女房たちに古今和歌集の上の句を示し、下の句を答えさせるという口頭試問の場面が描かれている。日々テストに追われている生徒たちにとって、親しみを感じる素材ではないかと考え、単元「実演を通して古典の理解を深めよう」の教材とした。脚本の作成・実演をグループで行うため、実演そのものをパフォーマンス課題とすることは困難と考え、実演を通して理解したことをまとめた文章として記述させ、パフォーマンス課題とした。また、実演を通して得た気付きをワークシートに記入させ、その中から数例を取り上げて生徒に評価させた。

ア 学習指導案（概要）

1 教科・科目	国語・古典	2 指導者	小林 恭子
3 単元名・教材	実演を通して古典の理解を深めよう。・『枕草子』『古今の草子を』		
4 単元の目標	(1) 登場人物のものの見方や感じ方を理解しようとする。(関心・意欲・態度)		

- (2) 登場人物のものの見方や感じ方を理解する。(読む能力)
 (3) 作品の書かれた時代背景や和歌の価値を理解する。(知識・理解)

5 単元の指導計画(全6時間)

6 本時の展開(6時間目)

	学習活動(生徒)	指導上の留意点(教員)	評価の観点
導入	実演の練習をする。	小道具を用意する。	関心・意欲・態度
展開	実演をする。	評価表に記入して評価させる。	関心・意欲・態度
まとめ	まとめの文章を書き、評価する。	着眼点を示して記述させる。	読む能力

7 評価手法

- ・まとめの文章をパフォーマンス課題とした。数人の文章をプリントして配布し、生徒用ループリックを用いて生徒に評価させるとともに、自分のまとめの文章についても評価させる。

イ 研究授業の振り返り

脚本化・実演という言語活動に、生徒は意欲的に取り組んだ。今まで、授業以外の場所で、生徒が古典について話すのを聞いたことはなかったが、この活動を始めると、休み時間や授業後に「少納言」「定子さま」などという会話が飛び交うようになった。羽織や扇などの小道具を用意したことで生徒はますます盛り上がり、興味喚起は十分にできた。



しかし、この学習活動の評価について、まとめの文章をパフォーマンス課題とすることが適切なのか、自信がもてなかった。また、作成したループリックも、妥当性に疑問が残った。次回は脚本化・実演の活動を継続し、パフォーマンス課題とループリックについて更に検討することにした。

【まとめの文章生徒作品例：読む能力 評価A】

枕草子が書かれた時代の貴族は、夜更かしをして遅くまでおしゃべりをしたりして、のんびりと優雅な生活を送っていたと思います。劇の脚本を作るときには、文の意味や流れだけでなく人物の感情や性格まで考えなければいけなかったのが、より理解が深まりました。私の班では定子様は女房たちにきつく怒るのではなく、あきれて嘆くという風にしました。身分の高い人がなりふり構わず大声で怒ったりしないのではないかと思ったからです。その人の身分や当時の生活も意識して感情を考えることができたと思います。この時代の和歌は、宮廷に仕える者は知っておかなければならない知識で、その人が優秀であるかどうかを区別する基準だったのではないかと考えました。

(2) 早稲田大学訪問(平成26年6月28日)

早稲田大学教育・総合科学学術院 町田守弘教授を訪ね、研究計画、及び第1回研究授業についての指導を受けた。指導内容は以下のとおりである。

ア 研究計画について

- ・古典の「楽しさ」を実感させることにより、生徒の興味・関心を高め、読む能力の向上につなげるという基本的な考え方はよい。
- ・「演ずる」という手法の導入は、古典の学習では珍しく、新鮮である。生徒にストーリーの展開や登場人物の気持ちを理解させるのに、効果的な方法である。

イ 第1回研究授業について

- ・この授業において何を学習させるか、よく考える必要がある。授業のポイントや、「楽しさ」を感じ

させる切り口は、十分な教材研究から生まれる。地道な教材研究によって、どこに「楽しさ」が見出せるか、それを指導者が発見することが大切である。

- ・(枕草子のテキストを脚本化・上演した後で記した)ワークシートには、生徒のいきいきとした感想が記されている。工夫を凝らした授業の効果が感じられる。これをどのように評価するかは、「何を学ばせたいのか」というねらいによって決まる。「何を学ばせたいのか」をどこまでも具体的に考えることによって、評価の基準もおのずと決まる。次回の指導案では、十分その点を検討してほしい。

(3) 言語活動指導者研修参加 (平成 26 年 10 月 15 日～17 日)

「言語活動指導者研修」では、授業改善のためには生徒がアクティブに活動する言語活動が必要であることを再認識し、また、他教科における言語活動例について学ぶ機会を得た。

(4) 研究授業・研究協議②第 3 学年古典『史記』「荊軻」(平成 26 年 10 月 27 日)

古典の、特に史実を扱った作品を読むときには、書かれた時代や環境についてある程度理解した上で、読み深めさせたい。単元「登場人物の生き方について考え、心情を想像し、理解を深めよう」では、『史記』の「刺客列伝(荊軻伝)」を教材とし、戦国時代末期の中国の政治や文化の状況について確認した上で読解を進めた。その中で、生きて帰れぬことを知りながら秦王の暗殺に向かう荊軻が、歌を歌いながら旅立つ場面を取り上げ、その時の荊軻の心情をモノログとして作成し実演することを言語活動とした。実演そのものを評価したいと思い、実演後に生徒に相互評価をさせた。パフォーマンス課題は、荊軻の人物像のまとめとした。

ア 学習指導案 (概要)

1 教科・科目	国語・古典	2 指導者	小林 恭子
3 単元名・教材	登場人物の生き方について考え、心情を想像し、理解を深めよう。・『史記』「荊軻」		
4 単元の目標	(1) 人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方や感じ方を理解しようとする。(関心・意欲・態度) (2) 人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方や感じ方を理解する。(読む能力) (3) 我が国の文化と中国の文化の関係について理解を深める。(知識・理解)		
5 単元の指導計画(全 6 時間)			
6 本時の展開(6 時間目)			
	学習活動(生徒)	指導上の留意点(教員)	評価の観点
導入	前時に作成した、荊軻のモノログをもとに実演の準備・練習をする。	セリフに込められた心情の創作であることを意識させる。	関心・意欲・態度 読む能力
展開	実演をし、相互評価する。	実演を見た後、他のグループにその場で質疑応答をさせる。	関心・意欲・態度
まとめ	人物像をまとめる。 脚本をリライトする。	発表を取り入れるよう助言する。	読む能力
7 評価手法	・人物像をまとめた文章及びリライトした脚本をパフォーマンス課題とし、ルーブリックを用いて評価した。		

イ 研究授業の振り返り

荊軻の生き方を理解するためには、時代背景についての知識が必要だと考え、まず中国の古代史の簡単な流れと諸子百家について復習し、特に儒家・法家の思想についてグループ学習で確認した。一通り本文の解釈をした後、荊軻が「風蕭々兮易水寒、壯士一去兮不復還」と歌う場面の心情を想像し



てモノログの形にし、演じるという言語活動を設定した。この学習活動の成果を、当初は「荊軻の生き方について感じたこと・考えたことを述べる」というパフォーマンス課題によって評価しようとしたのだが、あらかじめ作成しておいたループリックでうまく評価が



できず、また、研究協議においても、この課題への解答によって「読む能力」を測るのは無理ではないかという指摘も受けた。その後、パフォーマンス課題を脚本のリライトに変更し、他のクラスで実施したところ、実演の前後の脚本を比べることによって、作品理解の深まりを捉えることができた。

【まとめの文章生徒作品例：読む能力 評価A】

衛の国の人である荊軻は、知り合いの田光先生に名指しされて、秦王暗殺の密命を受けた。成功してもしなくても、命が消えることは分かっているのに、その依頼を受けた理由がイマイチ分からなかった。指名してくれた田光先生の顔をたてるためか。断ったら自分の生き方に背くことになるのか。太子丹が秦王暗殺を計画した動機が荊軻の心を動かしたとは、今の時代に生きている僕には到底思えません。でも荊軻は暗殺を受けたわけなので、当時(戦国時代)の人々との思想の違いかもしれません。

(5) 研究授業・研究協議③第2学年古典B『源氏物語』「若紫」(平成26年10月27日)

『源氏物語』の「若紫」から、光源氏が若紫の成長に興味を示していること、若紫に藤壺宮を投影していることの二点を読み取ってほしいと思い、若紫を垣間見する光源氏的心情を惟光との会話にして表現させた。また、本文にはない光源氏と惟光の会話だが、本文を根拠に会話を想像させ、作中の人間関係や心情が現代に通ずるものであると感じてほしいと思い、実演をさせた。

ア 学習指導案(概要)

1 教科・科目	国語・古典B	2 指導者	松浦 由佳
3 単元名・教材	実演を通して古典の理解を深めよう。・『源氏物語』「若紫」		
4 単元の目標	(1) 登場人物の心情を理解し、ものの見方や感じ方を理解しようとする。(関心・意欲・態度) (2) 登場人物の心情を理解し、ものの見方や感じ方を理解する。(読む能力) (3) 古典を読むために必要な、時代背景や風習、文化を理解する。(知識・理解)		
5 単元の指導計画(全8時間)			
6 本時の展開(5時間目)			
	学習活動(生徒)	指導上の留意点(教員)	評価の観点
導入	「若紫」前半の内容を振り返る。	隣同士ペアになり、活動の意図を意識させる。	関心・意欲・態度 読む能力
展開	光源氏と惟光の会話を創作する。 実演をする。	着目点を意識させ、ワークシートに記入させる。実演後、ワークシートを修正させる。	関心・意欲・態度 読む能力
まとめ	本時のまとめと次時の内容を知る。	ワークシートを回収して評価する。	読む能力
7 評価手法	・光源氏と惟光の会話を創作したワークシートに、実演後に修正を加えさせ、ループリックを用いて評価した。		

イ 研究授業の振り返り

生徒は予想以上に光源氏的心情をくみ取ることができた。当初授業のねらいとしていたのは、光源



氏が若紫に、思慕する藤壺宮を投影している点を読み取ることだったが、生徒はそれだけでなく、藤壺宮の立場を考え、光源氏の思いは惟光にさえも気付かれてはならないものである、ということにも気付いた。授業前に作成したループリックのA評価は「光源氏が若紫の成長に興味を示していること、若紫に藤壺宮を投影していることを読み取ることができる」としていたが、このA評価の更に上の段階を設定する必要があると感じた。



研究協議では次のような指摘を受けた。

- ・本時だけの達成度を見る課題があってもよいのではないか。
- ・自分の考えを見直す時間をもっと取ってもよい。
- ・授業に対する感想を書かせるなど、評価に関する細かい工夫が必要である。

そこで、生徒にこの授業に対する感想を聞いてみたところ、次のようなものが出された。

- ・光源氏と惟光は遠い存在だと思っていたが、他の班の発表を聞くと、現代でもよくありそうな会話だなと親近感がわいた。
- ・今も昔も人が思うことや、好きになった人を忘れられない気持ちは共通しているんだなと感じた。垣間見しながら男二人が女の子について話している様子は、現代も同じように「あの子かわいいね」などと男同士で話しているのが想像できておもしろいと思った。
- ・せりふを考える上で、光源氏はどんなキャラでどんな性格か、光源氏と惟光の関係、など考えることができた。大切なせりふとそうでないせりふを考えることもできた。

会話を想像して演じる活動を通して、通り一遍の解釈では気付かないことに生徒は気づき、とても有意義な活動となった。しかし、話し合いの中では気付いているが、ワークシートには表現することができない班もあり、パフォーマンス課題に改善の余地があると感じた。

(6) 研究授業・研究協議④第3学年古典B『蜻蛉日記』「うつろひたる菊」(平成26年12月10日)

『蜻蛉日記』より、作者が、夫が他の女に宛てた手紙を見つける場面を描いた「うつろひたる菊」を教材とした。夫である藤原兼家とのやりとりが描かれた後、それらを踏まえて作者が歌を詠むという話の流れは、平安時代の歌物語や女流日記の典型的な型であるため、他の作品を読むのにも役立つ。教材を3場面に分け、グループごとに分担して脚本を作成させ、実演及び生徒による相互評価をさせた。パフォーマンス課題として、『蜻蛉日記』の別の章段の和歌の解釈を書かせ、作者の抱える背景やそれまでの経緯を踏まえて和歌が詠まれることを理解させたいと考えた。

ア 学習指導案(概要)

1 教科・科目	国語・古典	2 指導者	小林 恭子
3 単元名・教材	実演を通して作品の理解を深めよう。・『蜻蛉日記』「うつろひたる菊」		
4 単元の目標	(1) 登場人物の心情を理解し、ものの見方や感じ方を豊かにしようとする。(関心・意欲・態度) (2) 登場人物の心情を理解し、ものの見方や感じ方を豊かにする。(読む能力) (3) 伝統的な言語文化の一つである「和歌」の内容を的確にとらえる。(知識・理解)		
5 単元の指導計画(全4時間)	1次(1時間)・本文を音読し、現代語訳する。(ペア活動) 2次(2時間)・本文を3場面に分け、分担して脚本化する。(グループ活動) ・グループごとに実演し、相互評価をする。(グループ活動) ※本時		

- 3次(1時間)・本文中の和歌を、心情が伝わるように書き換える。(ワークシート記入)
- ・他の文章で、和歌を詠んだときの作者の心情を説明する。(パフォーマンス課題)

6 本時の展開(3時間目)

	学習活動(生徒)	指導上の留意点(教員)	評価の観点
導入	前時に作成した脚本をもとに、実演の打ち合わせ・練習をする。	和歌中の心情理解を深める活動であることを意識させる。	関心・意欲・態度 読む能力
展開	実演をし、相互評価する。	実演を見た後、評価・発表をさせる。	関心・意欲・態度
まとめ	本時のまとめと次時の内容を知る。	次時は和歌の心情把握をする活動を行うことを予告する。	読む能力

7 評価手法

- ・『蜻蛉日記』中の別の章段「泪杯の水」を読んで、その本文中の和歌について、それを詠んだときの作者の心情を400字程度で書かせる。パフォーマンス課題①として、ループリックを用いて読む能力を評価する。
- ・本文を現代語訳した後、ワークシートに『蜻蛉日記』「うつろひたる菊」中の3首の和歌の解釈を書かせる。実演の後にそれぞれの解釈を書き直させ、パフォーマンス課題②として、ループリックにより関心・意欲・態度を評価する。
- ・実演を見た後、観ていたグループはすぐにその評価を話し合っって簡単なコメントにまとめ、グループごとに配布されたホワイトボードに記入する。指導者は机間指導をしながら、各グループのコメントを全体に紹介する。また、同じ文言を付箋に記入し、発表したグループに渡す。このような方法で相互評価をする。
- ・自己評価表を配布し、活動を振り返ってABCで自己評価をする。回収し、指導者の振り返りに役立てる。

イ 研究授業の振り返り

脚本化し実演するという授業も3回目となり、生徒は経験を積んで確実にスキルアップした。限られた時間の中で手際よく準備に取りかかり、活発な話し合いをしていた。「菊の色あせた感じを出そうか」「家来は、作者の前ではひざまずいているんじゃないか」「文箱も人でやっちゃおうよ」など、こちらの用意した小道具を使わずに創意工夫するグループも現れた。どのグループも、より現代的に物語を脚色した実演となっており、状況を読み取る力が付いているようにも思われた。

実演後、相互評価を実施した。発表が終わるとすぐに観ていたグループは評価をし、短いコメントにまとめ、班ごとに配布したホワイトボードに書く。指導者は机間指導をし、書けたグループのボードを全体に示してコメントを紹介した。ホワイトボードはすぐに消してしまうので、同じコメントを付箋にも書かせて発表したグループにフィードバックした。前回『史記』の授業では実演後に質疑応答の時間を設けたが、観ていた生徒たちからコメントが出ず、適切に相互評価ができなかった。しかし今回は、予想以上に生徒の動きがよく、短い時間でテンポよくコメントをまとめていた。ホワイトボードを使ったことが効果的であったと思われる。相互評価を付箋に記し、演じたグループに渡したことで、発表したグループの自己評価を促すことにもなった。

本単元の目標は、「登場人物の心情を理解し、ものの見方や考え方、感じ方を豊かにする(読む能力)」である。『蜻蛉日記』は、藤原道綱母の夫や息子への思いを綴った日記であり、文中の和歌はその思いを凝縮したものである。そこで、和歌の解釈をすることが作者の心情を理解することになると考え、「和歌に詠まれた心情を理解している」を具体的な評価規準とした。和歌の解釈には、歌を詠む前後の状況を的確に読み取る必要があるが、実演によって状況の理解が進んだ。そして、和歌の前後に描かれた状況を手がかりとして歌意を読み取るというスキルを生かせば、他の場面の和歌を解釈することもできるであろうと考え、パフォーマンス課題①を作成した。同じ作品の「泪杯の水」(「うつろひ



たる菊」の12年後の場面)の本文を示し、「絶えぬるか影だにあらば問ふべきをかたみの水は水草みにけり」という和歌に込められた作者の心情を400字程度で説明するという課題にしたのである。

ウ ルーブリック

観点	A	B	C
	3	2	1
和歌に込められた登場人物の心情を理解することができる。(読む能力)	和歌の解釈として、作者の、 <u>それまでのいきさつを正しく踏まえた兼家に対する感情を、和歌に用いられた表現に絡めて述べる</u> ことができる。	和歌の解釈として、作者の、 <u>それまでのいきさつを正しく踏まえた兼家に対する感情を述べる</u> ことができる。	和歌の解釈として、作者の、 <u>兼家に対する感情を述べてはいるが、それまでのいきさつを正しく理解できない。または、感情を述べていない。</u>
実演を経て、和歌の解釈を深めることができる。(関心・意欲・態度)	実演を見て、 <u>和歌の解釈に沿って登場人物の心情理解を深めた解釈の書き直し</u> をすることができる。	実演を見て、 <u>和歌の解釈の書き直し</u> をすることができる。	和歌の解釈をすることはできるが、 <u>実演を見ても解釈を書き直すことができない。または、解釈ができない。</u>

【ワークシート生徒記入例：読む能力 評価A】(下線は指導者による)

道綱母は、のどかに暮らしていたものの、兼家とは言い争いをするようになって心がすれ違っていった。そして、ついに兼家に愛想を尽かされ、恨み言を言ったあげく出ていかれてしまった。息子の道綱は、父からもう来ないと言われたため、父が出て行くとひどく泣き出した。道綱母は息子が泣く理由を察しながらも、夫の言葉は冗談に過ぎないと思っており、息子と違ってそれほど衝撃は受けていなかった。しかし夫は五、六日経っても帰ってこず、いつもと違うことに気づいた道綱母は、しだいに心細さを感じ始め、もともと夫婦仲はあまり良くなかったから、二人の関係もこれで終わるのではないかと思うようになっていった。そんな時、夫が使っていた泔杯の水が何日もそのままになっているのが目に入った。水の姿から夫と離れている時間の長さが感じられた。そこで道綱母は、夫と離れて関係が絶えたのかと聞くこともできないつらさを水面に、時の長さを浮いた水草にそれぞれ重ね合わせて歌を詠んだ。

【ワークシート生徒記入例：読む能力 評価A】(下線は指導者による)

・・・・・・・・ 泔杯を見て、水面に映るあなたの姿さえあれば問うだろうが、水面は水草が浮いてしまって見えないと詠み、悲しい気持ちを表している。

また、「うつろひたる菊」の本文中の3首の和歌の解釈が、実演を経てどのように深まったのかを見るために、ワークシートに和歌の解釈の書き直しをさせ、パフォーマンス課題②とした。

【ワークシート生徒記入例：関心・意欲・態度 評価A】(下線は指導者による)

【うたがはしほかに渡せるふみ見ればここやとだえにならむとすらむ】

疑わしいこと。よその女に送る手紙を見ると、私のところへ来るのを途絶えようとしているのでしょうか。

↓

なんてことかしら。まさか他の女に手紙！？私のところへはもう来ないというの！？

【ワークシート生徒記入例：関心・意欲・態度 評価B】

【うたがはしほかに渡せるふみ見ればここやとだえにならむとすらむ】

疑わしいこと。よその女に送る手紙を見ると、私のところへ来るのを途絶えようとしているのでしょうか。



あなた浮気してるでしょ。

単元終了後、授業前に作っておいたルーブリック【読む能力】(A「和歌が詠まれた状況を踏まえて、相手に対する感情が分かるような和歌の解釈を述べることができる」、B「相手に対する感情が分かるような和歌の解釈を述べることができる」、C「記述ができない」)でパフォーマンス課題①を評価しようとしたところ、生徒の文章では和歌が詠まれた状況と心情は分かちがたく表現されており、その記述の違いに差をつけることは適切でないと思われた。そのため、ルーブリックの基準を上記のように変更して評価した。A評価 30% (21名)、B評価 60% (42名)、C評価 10% (7名)であった。C評価の作品は、そこまでのいきさつを正しく理解できていないものであった。

また、【関心・意欲・態度】のルーブリックでパフォーマンス課題②を評価した。A評価 44% (31名)、B評価 56% (39名)、C評価はいなかった。A評価とB評価については、どれだけ原文に即して読み深めているかという観点で差をつけた。しかし、A評価の作品とB評価の作品を比べてみると、B評価の作品の方に、よりリアリティのある感情表現となっているものが多いようにも感じた。和歌の一語一語により忠実な解釈が、より深く心情を反映しているとは、一概に言えないのではないかという疑問も生じた。適切なルーブリックの作成方法については、なお課題が残っている。

(7) 研究授業・研究協議⑤第2学年古典B『大鏡』「道長、伊周の競射」(平成27年1月21日)

ア 学習指導案(概要)

1 教科・科目	国語・古典B		2 指導者	松浦 由佳
3 単元名・教材	実演を通して作品の理解を深めよう。・『大鏡』「道長、伊周の競射」			
4 単元の目標	(1) 本文を根拠にして、登場人物の人物像や心情を理解しようとする。(関心・意欲・態度) (2) 本文を根拠にして、登場人物の人物像や心情を理解する。(読む能力) (3) 文語の働きや、時代背景、登場人物の人間関係を理解する。(知識・理解)			
5 単元の指導計画(全5時間)				
6 本時の展開(5時間目)				
	学習活動(生徒)	指導上の留意点(教員)	評価の観点	
導入	本文を音読する。 本時の学習内容を知る。	ペアで音読をさせ、その後、発表の準備をさせる。	関心・意欲・態度	
展開	本文を実演する。 実演を批評し、脚本をブラッシュアップする。	実演や実演後の批評から、自分の作成した脚本への加筆修正を色分けして行わせる。	関心・意欲・態度 読む能力	
まとめ	本時のまとめをする。	ワークシートを回収して評価する。自己評価させる。	読む能力	
7 評価手法	・道隆、伊周、道長それぞれの人物像をワークシートにまとめさせ、ルーブリックによって評価する。 ・加筆修正した脚本を、ルーブリックによって評価する。			

イ 研究授業の振り返り



脚本化して演じるという授業も回数を重ね、生徒も積極的に楽しんで取り組むことができるようになってきた。授業後や昼休みに、自主的に話しや練習をする姿も見かける。今回は、第三者の視点で描かれている『大鏡』の本文を、登場人物の視点から読み、その心情をせりふにすることによって、登場人物の人間像をより身近に感じ、理解を深めることをねらいとした。実演後の相互評価として、他のグループの実演について気付いたことを発表させ、それを踏まえて自分の脚本に色ペンで加筆をさせる予定であったが、生徒はやや苦戦しており、なかなか手が動かないようであった。

この作品を読むに当たってのねらいである人物理解については、実演後にワークシートを用いて、道隆、伊周、道長の三人がどのような人物か、本文中から根拠を示しながら述べさせることで確認した。以下は生徒の作品例である（下線は授業者による）。



道長（評価B）

- ・射る前に堂々と予言をすところから、男らしくメンタルが強い人。
- ・延長戦の様子から、負けず嫌いな人だと思った。

道長（評価A）

- ・しきたりや風習にとらわれず、場の空気を考えないところが自分勝手だが、自信家で野心のある意志の強い人物。
- ・主催者を勝たせるという当時のしきたりを考えると、最初から道隆親子を完膚なきまでにたたきのめすことを考えて南の院に來たのだったら、相当な自信と度胸と覚悟がある人で、少し怖いと思った。

今回は、脚本作成の段階で、三人の登場人物の視点から作品を読み替えることにしたため、三人それぞれについて人物批評をさせた。しかし、授業後の研究協議では、三人の人物像を別々に述べるより、道長の人物像について他の二人と対照して評価させる方が、作者の意図により近づくと考えられるので、脚本作成からパフォーマンス課題まで、その視点で実施してみてもどうかという助言を受けた。また、生徒の相互評価については、手紙のように紙に書いたものを交流する方法がよいのではないかと助言も受けた。脚本に加筆させる場合は、生徒に書き方を提示する必要があるという指摘もあった。

研究授業・研究協議を経て、古典の授業で最も重要である、本文に立ち返らせるという点においては、脚本作成中や実演後に、このせりふは本文のどこを見て考えたのか、というような問いを投げかけて確認することが不可欠だと思った。さらに、実演そのものを評価対象とすることは、妥当性を担保しにくいと考え、作成させた脚本によって評価することを考えてきたのだが、今回、指導者側の想像を超える生徒の熱演と活動への意欲的な態度を見て、実演そのものから「関心・意欲・態度」の観点について評価する妥当な方法がないか、検討する必要性を感じた。また、生徒の作品に対する理解が全て脚本に表れるとは限らないことも考え合わせ、適切なパフォーマンス課題の在り方について、再考する必要があると思った。

5 実践のまとめと考察

研究授業③（3年古典『蜻蛉日記』）において実施した自己評価は以下のような結果になった。

評価項目	A	B	C
①実演を見たり，和歌の解釈を書き換えたりすることで，詠み手の心情がより深く理解できるようになった。	56.1% (37)	43.9% (29)	0% (0)
②和歌の中に表れる背景や気持ちを読み取ることができるようになった。	43.9% (29)	56.1% (37)	0% (0)
③解釈・脚本化・実演に積極的に関わり，グループ（ペア）活動に貢献できた。	59.1% (39)	39.4% (26)	1.5% (1)

※()内は実人数。

評価項目①②において，C評価をした生徒は一人もいなかった。特に①は，A評価をした生徒が5割を超えており，「実演」「書き換え」によって心情理解が深まることを実感している様子が分かる。また，評価項目③については，約6割の生徒がA評価であることから，この活動に意欲的に取り組めた様子がうかがえる。

上記の自己評価と同時に，実演の授業についての感想や意見を自由記述させた。以下に，生徒の意見の一部を抜粋する。

- ・実演では，口語訳どおりに話すよりも，自分たちで現代風にしたセリフや動きをするのが楽しかったです。ただ，訳がちゃんと出来ていないとアレンジした時に食い違いそうなので，原作の話をしっかりつかむのも大事だと思いました。また，色々な衣服や道具が使えて嬉しかったです。
- ・新鮮な感じがして面白かった。あまりたくさんありすぎると大変だけど，たまにやると，良いアクセントになりうると思った。このような発表の経験は大切です。
- ・最初に比べて最後の発表は楽に演技することができて，少し楽しかった。
- ・グループで話し合うと，今まで自分が考えていたこととは違った意見が出てきたり，また全員の意見が一致しているものもあったりして，いろいろな視点から物語を見ることができた。
- ・実演の授業というのは中学ではなく，高校生になって初めてやりました。普段，イスに座って先生の話の聞いているだけの授業は退屈だったので，実演の授業はとても興味深かったです。内容が理解しやすくなりました。
- ・実演をすることで，“脚本を作らなきゃ”→(だから)“解釈ちゃんとしなきゃ”っていう意識で積極的に内容を理解しようと思うことができたし，ちゃんと理解することができたと思います。他の班の実演を見ることで，“こんな風に理解することもできるんだ”って思えたり，同じ内容なのに全く違う雰囲気のある作品を見てる感じになれたのがとても楽しかったです。見てる人から感想をもらえるのも嬉しかったです。
- ・私は今までの古典の授業で，話の内容はきちんと理解しているつもりだったが，どんな状況，心情で和歌を詠んでいたのかということまでは曖昧のままだった。3回の実演の授業により，グループワークという楽しい状況で考えられるとともに，話に入りこむことができ，古典文学を読む楽しさを味わえた。
- ・実演の授業は，その場面のイメージが視覚化されてとてもわかりやすく，解釈するのに役に立ちましたが，ユーモアを追求しすぎて内容がおろそかになっているグループの発表はあまり勉強にならなくて，程度というものをわきまえなければいけないと思いました。

対象生徒 66 名の中で，実演を取り入れた授業に対する否定的な意見を述べた生徒は一人もいなかった。実演そのものよりも，脚本を作るためのグループワークを評価する声も多く，グループで話し合いながら何かを作り上げる活動は，多くの可能性を秘めていると感じた。

第3学年文型で実施した3回の実践を振り返ってみると，はじめは「人前で劇をやる」という学芸会のような意識で活動していた生徒もおり，笑いを取ろうと考えて本文から逸脱してしまっているグ

ループもあった。しかし、回を重ねるにつれて、本文の記述を確認しながら脚本を作る合理的な話し合いが行われるようになり、実演の準備の時間に意欲的に学習する様子が見られるようになった。実演を経た上で文章を書くというパフォーマンス課題に取り組むことによって、生徒自身が作品を理解し楽しむことができたからではないかと考えている。

パフォーマンス課題については、単元の目標や教材によって適切なものは異なると思うが、研究授業③のように、初見の文章で既習の教材と同様に読めるかを試す課題を設定するのも、一案であろう。来年度、さまざまな単元で試行したいと考えている。一方、この課題で測った「読む能力」と、同様に初見の文章によって校外模試等で測定される学力との間には、どのような差異があるのか、あるいはないのか、明らかにしていく必要もあると思う。

6 成果と課題

(1) 実践の成果

今回、研究を始めるに当たり、古典における本質的な問いを「古典に描かれた人物は、何を考え、どのように生きていたのか。(現代の私たちとどのように違い、どのように共通するのか。)」と考え、身に付けさせたい力を「古典の中の登場人物の生き方(思想や感情)を的確にとらえる力」とした。その背景には、作品や作中人物を通して感じたことや考えたことを、自分の人生に生かしてほしいという願いがある。そのために必要なことは、古典の世界が現代と全く違う環境であるという「場の理解」と、しかしそこに生きているのは自分と同じ人間であるという「心情の理解」であると考えた。今年度「古典の脚本化と実演」を実践した3年生文Ⅱ類型クラスを対象に、3年間の古典の学習についての振り返りや感想を記述させたところ、そのねらいを実現させた生徒もいることが分かった。以下は生徒の意見の一部である。

- ・古典の授業はただ文を読むだけではよくわからないけど、内容や、その言葉に隠された意味を考えると、現代につながる部分もたくさんあり、興味深かったです。昔の日本の文化に触れることもできてよかったです。
- ・3年間かけて古典を学び、和歌などは特に現代の人間関係とは大差なく、身の回りのほのぼのとした日常や夫婦のケンカシーンだったり、切なくなるような愛情のものだったり、共感できるものがあってやっていて楽しかったです。
- ・古典は文を理解できれば面白い文ばかりだと思いました。でも、文が理解できないとさっぱりわからない。理解できるとドラマみたいで面白い。入試では理解できるようにがんばりたい。
- ・古典はむずかしかったけど、やればちゃんとできるようになったので、きれいじゃないです。
- ・3年間僕が古典を通して学んだのは、昔の人と今の人との考え方や生活の違いです。本文を読んでいて分かりにくいのは、考え方も違うし、自分の持つ行動に対する偏見や予想と大きく違う場合があるからだと思います。古典はおもしろい科目でした。
- ・3年間を通じて、古典の文が段々読めるようになっていくのは嬉しかった。昔の出来事だけれども、今につながる部分があるのだと改めて感じる事ができた。
- ・3年間の授業を通して一番よかったのは、昔の文章でも嫌がらずに読めるようになり、昔の思想などにも興味を持つようになったことだと思います。現在の行事や慣習に残っているものもあるので、行事の発祥や歴史を調べたくなったりして、自分の思考や好みにも影響があったのではないかと思います。これからも色々発見していけるといいなと思います。

生徒は、古典について「昔の人と今の人との考え方の違い」や「現代につながる部分」があるとい

う感想を数多く述べている。これは、今回の実践によってのみ身に付いた力だとは言えない。しかし、古典に対するマイナスイメージを記したものがほとんどなかったのは、今回の実践の成果であると言ってよいのではないかと考えている。

今までの実践から、「古典」「古典B」という科目において「作品の脚本化と実演」という言語活動が効果的であることが明らかになってはきたが、この活動を通して育成した学力を適切に評価する方法は、なかなか見えてこなかった。そもそも「評価とは何か」という問いに対する見解があいまいなまま研究を進めていたため、その都度行き詰ってしまうのは当然であった。評価についての疑問を解決する方法を探っていたところ、それについて検討された資料が文科省より発表されていたため、その内容に沿って整理をした。（育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会 一論点整理一 平成26年3月31日）要点は以下のとおりである。

- ・評価は、総括的な評価だけでなく、形成的な評価の重要性を認識する必要があり、評価を生かして指導や教育課程の改善を図ることが重要である。
- ・評価の基準を、「何を知っているか」にとどまらず、「何ができるか」へと改善することが必要であり、「知っていることを活用して何ができるか」を評価する在り方へと発展させていく必要がある。
- ・評価は、成績（順位）をつけるための評価か（評定）、活動改善のための評価か（評価）の目的別に区別をするべきである。
- ・パフォーマンス課題とは、様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題であり、それを評価する評価基準表がルーブリックである。
- ・パフォーマンス評価、ルーブリックの作成、ポートフォリオ評価については、往々にして負担が大きく、また、知識や技能の評価には適さない場合もある。

今までは、評価とは授業者が、学習活動の全てを数値化し、評定に反映させねばならないものだと考えていたが、全ての評価を数値化する必要はなく、指導の改善のために行うものも評価であり、指導者が指導の改善に資すればよいのだということが分かった。

そこで、これらの内容を踏まえて、研究授業③において以下のようにさまざまな評価を実践した。

- ①単元のねらいを実現するための力（スキルや能力）が身に付いたかどうかを測るために、初見の文章を用いて、ねらうスキルや能力を使って解決するパフォーマンス課題を設定する。
- ②実演後に脚本等をリライトさせ、パフォーマンス課題とする。
- ③パフォーマンス課題を評価するルーブリックは、「単元の目標（学習指導要領の指導事項）」を具体化したものをB評価とし、内容の深まりによってA評価を設定して、指導者が生徒の「読む能力」または「関心・意欲・態度」を評価する。
- ④実演後にグループ間で相互評価をさせ、その場で発表させて、全体で共有する。
- ⑤まとめとして自己評価をさせ、その結果を授業者の指導改善につなげる。

上記の評価を実施した結果、パフォーマンス評価（上記①②③）・相互評価（④）・自己評価（⑤）の三本立ての評価をするのがよいのではないかと結論が、ひとまず出たように思う。相互評価、自己評価は生徒の学習活動であるため、指導者は①②のパフォーマンス課題の評価をし、生徒の自己評価表を参考にして指導の改善を図ればよいと考えた。相互評価は、実演後すぐに実施した方がよく、手際よくまとめられるホワイトボードを使用したコメント作成は効果的である。さらに、付箋に記録して実演者に渡すことで、コメントを後に残すこともできる。評価を細分化すればするほど教員の負担は増し、実際には使えないものになっていく。上記のような三本立ての評価は、パフォーマンス課題の内容にもよるが、比較的負担が少なく、多くの学校で取り組めるのではないだろうか。

(2) 今後の課題

今回の言語活動は古典作品を演じるというものであった。生徒の意欲は高かったが、成果を評価するパフォーマンス課題やループリックについては、より妥当なものを考案する必要がある。また、もう少し時間をかけて「紙芝居」「絵コンテ」「ラジオドラマ」などを制作することができれば、生徒作品を残すことができ、活動自体を評価することも、より可能になるだろう。

また、今回、生徒たちの意欲向上に一役買ったのが、小道具の存在であった。古着屋で手に入れた羽織や、百円ショップの布で作った烏帽子など、ちょっとした小道具があるだけで、生徒たちの意欲は格段に高まる。時間や費用に限りはあるが、できる範囲で配慮するのがよいと思う。

さらに、来年度は、第1学年国語総合において、基礎学力の定着を図り、学習意欲の向上を目指す言語活動や評価手法の研究に取り組もうと考えている。それとともに、第2・3学年において、脚本化と実演の実践を継続し、パフォーマンス課題の開発とループリックの改訂を進める予定である。

7 おわりに

今年度は試行錯誤の繰り返しで、どんな能力を、どのように育て、どのような方法でその成果を確認すればよいのか、考え続ける一年であった。難しい研究テーマに向き合う日々が続いたが、生徒とともに作品を読み、意味や解釈について話し合い、脚本にして演じたり演技を見たりする学習活動は、生徒の反応もよく楽しいものであった。知識と想像力を駆使してつくった脚本を演じることにより、遠い時代に生きた人々の生活や人生に思いをはせ、そこに自分の生き方や感じ方を重ね合わせて、内的な体験を豊かにしていく生徒たち。彼らの学びの姿を見て、これこそが本来の古典の学習なのだと、改めて気付かされる思いだった。知識を知識のままで終わらせず、知識を使って古典作品の中に生きる人間に肉薄し、その人生や思想に直接触れることができれば、生徒たちは古典を「嫌い」とは言わないし、「役に立たない」とも言わない。古典作品の中でさまざまな人物に出会うおもしろさを知った生徒は、機会があれば、今後も古典の作品を手取るだろう。そうした生徒の実感に迫る授業を実施できたということが、今年度一番の成果だったのではないかと思う。

生徒たちが「読む」ということの楽しさを知り、より豊かな人生を生きることを願って、今後の研究を続けていきたい。

参考文献等

- 文部科学省『高等学校学習指導要領』平成21年3月公示
- 中央教育審議会初等中等教育部会分科会高等学校教育部会『初等中等教育分科会高等学校教育部会審議まとめ ～高校教育の質の確保・向上に向けて～』平成26年6月
- 『育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会－論点整理－』平成26年3月31日取りまとめ
- 松下佳代『パフォーマンス評価－子どもの思考と表現を評価する－』日本標準ブックレット No.7 2007年12月発行
- 田中耕治『新しい「評価のあり方」を拓く－「目標に準拠した評価」のこれまでとこれから－』日本標準ブックレット No.12 2010年10月発行
- 西岡加名恵『「逆引き設計」で確かな学力を保障する』明治図書 2008年5月発行
- 町田守弘『実践国語科教育法「楽しく、力のつく」授業の創造』学文社 2012年9月発行
- 西辻正副『評価規準をどう生かすか 高校 選択科目編』明治書院 2013年7月発行